

「鎮魂の歌」歌詞誕生秘話 千葉 隆男

みなさん、こんにちは。千葉隆男です。
震災から四年も経ちますけれども苦労や悩みの多い暮らしをなさっていらっしゃると思います。遅ればせながら心からお見舞い申し上げます。



これから話をさせていただきますが、居眠りしてもかまいませんし欠伸をされてもかまいません。どうぞ、くつろいだ時間にさせていただきたいと思えます。

講演を引き受けさせた3つの力

さて、「鎮魂の歌」について話をしてほしいとお誘いを受けたとき、「それでは」と引き受けることになったのは、3つの力に背中を押されたからでした。

第1は、今日の会の企画者である高館さんの情熱と行動力です。高館さんについては私より皆さんの方がよくご存知のことと思います。

次には、毎月定めた日に、「鎮魂の歌」を歌い継いでおられるという京都の方々がおいでになる、との計画を知ったからです。京都といえば、比叡山延暦寺に千三百年も灯し続けられてきた「不滅の法灯」がありますが、その灯火の燃料となる菜種を届けようという運動に共鳴し、菜種栽培を始めて25年にもなる私です。詳しいことは時間の関係で省きますが、昭和45年、京都でおこなわれた第1回の世界宗教者会議で、世界平和を実現させるためには宗教関係者ができることから協力しなければならないとの発想で、延暦寺のお座主様たちが計画し開かれた会議なそうです。参加した神道関係の方が共感し、日本でできることはと思案したところ、「不滅の法灯」を灯し続ける行動を呼びかけることにしたのだそうです。趣旨には、「千円献金を、とねがえば簡単であるが1坪でも菜種を育て、実を寄せ合うことに意義がある」と説いているのです。

今日お出でになった京都の皆さんは、まさに1人1人が灯し火を灯されていていらっしゃる方々であると思い、「ご苦労さまです」「ありがとうございます」とお礼の心を伝えたいと思ったのです。

3つめです。ここ唐丹は、私の38年間の教職生活の最初の地なのです。6年お世話になりました。指導が未熟で、至らないことがたくさんありましたが、私自身は教えられることや学ぶことの多い6年でした。

赴任早々、家庭訪問が計画されていたので4年生の受け持ち児童43人の家庭を訪れました。ある女兒の家で、「先生、このごろ娘がこう言うんですよ。お母さん、わたしを

呼ぶとき、ちゃん付けしないでよ。いつまでも赤ちゃんでないんだから。」そして、「子どもが大きくなることは楽しみと寂しさがあるんですね。」と。

この話を耳にして私は驚きました。いや、感動を覚えたのです。それは、大学の卒業論文で「児童の自我意識の発達」についてまとめてきたからだったのです。このことは、退職後「千葉先生」と呼ばれた時、「さんづけでのお付き合いをお願いします」という言葉に結びつくのです。

唐丹で学んだこと

唐丹で学んだことはたくさんありますが、児童と直接関わりのないことを2つ話させていただきます。

(「此処櫓」と書いた書面を提示し) みなさん、この字をなんと読んでいただけるでしょうか。私は「こ・こ・ろ」と読んでいます。初任地の学校には、海辺の生活にあこがれて赴任しましたので、日曜日には漁師さんから船を借りて遊びました。当時は櫓でこぐ船でした。やってみるとなかなか思うように進みません。押し力と引く力のバランスがとれないのです。私は、押し方はよかったですけど引き方がまずく、船は右方向にだけ進んでしまうのでした。下宿でも漕ぎ方の練習を何度も行い、船を思うように進めることができたころ、「しえんしえい、このごろ、船こぎ、うまくなったなす」と声をかけられた時は嬉しかったですよ。



そして、私の上達ぶりを知った年配の方から魚釣りに誘われました。いろんな魚釣りを体験させていただきましたし、下宿のおばさんからも喜ばれたのです。そして、櫓漕ぎと心の持ち方に共通したものがあることに気付いたのです。いや、悟った、ともいえるのです。このことが、今も私の行動にも顕われてくるのです。

唐丹小学校の校歌

次は、校歌にまつわることです。創立が市内の学校でも早かったのに校歌はありませんでした。行事がある度に校歌の必要性が話題になっていました。ある時、PTAの役員から、あの方なら歌詞を作ってくださいませんかとの情報が寄せられました。

ある日曜日、「川端さんという方に作詞をお願いに行くのだが、一緒に行ってくれないか」と校長に誘われ同行したのでした。初めてお会いする方で、長年、仙台で官庁勤務をされ、今は故郷の小白浜の地で奥さまと二人暮らしをされているということでした。校長は訪問した理由といきさつを話し、歌詞づくりの依頼をしたのです。私は、「有難いお話ですが、もう年ですし、そういうものを書いたことがありませんので」と断られるのでは

ないかと内心心配していたのでした。ところが、「やってみましょう」との返事。嬉しかったですね。

安堵した気持ちで、奥さまが入れて下さった湯茶をいただきながらお話を聞いたのですが、その中で、私の心を強く打つ話があつたのです。一緒に聞いた校長はもうこの世の人ではありませんので、語り伝えることができるのは私一人です。郷土の先輩で校歌を作詞した人の実話です。子供たちにも聞かせたいと思うのです。

それは、仙台の中等学校に進学する時の試験に、分数の問題があつたのだそうです。ところが唐丹の学校では学んだことがなく、困ってしまったそうです。他の問題を速く解き、時間に余裕ができたので、考えてみたそうです。例えば、2分の1は半分のことだな、半分と半分を足すと1になるから分母を同じにして上の数を足せばいいのではないかと。全部は解答できなかつたそうですが、時間いっぱい挑戦したそうです。入学後、担任教師に「実は・・・」と、分数の解答がどうだったか尋ねたところ、調べてくれ、ほとんど正解であつたことを知ったそうです。「嬉しかったですね」「勉強は教えられたことを覚えることだけでなく考えることが大切なんだと思いました」と、つい先日のことのように話されるのでした。

その後、四方山話がつづいたのですが、「ところで、曲を私の知り合いに作らせましょうか」との話。校長は「願つてもないことです。お願いします」と即答し、「どちらさまなんでしょうか」と尋ねたところ、「千葉道といます」との返事。私はびっくりしました。岩手大学の音楽科の教授で、たくさんの曲を作っている方だったからです。関わりを尋ねたところ、「甥ですよ」との返事。再びびっくりしました。川端と千葉。盛岡と唐丹。全く関係がないと思われる二人が「血縁」で繋がっていたのです。

その後、血縁でなくともいわゆる見えない縁がまるで竹の根のように張り巡らされている世の中を知りました。そこで、忘れないようにと「深縁」という言葉を胸に収めているのです。

「鎮魂の歌」ができるまで

さて、鎮魂歌の歌詞作りについて話を進めます。私たちの会の県の事務局から文書をいただいたときは、良いことだけれど私には作れないと思っていたのです。ところが、ある朝、ウォーキングをしていたとき、犠牲となった知人や友人の声が聞こえてきたように思われたのです。

1時間前まで同じ場所にいた人、老いた母親を避難させようと職場から戻り玄関先で波に巻き込まれた教え子、体の不自由な夫を車いすに乗せて避難しようと家を後にしたとき波にのみこまれた福島の親戚、幸い遺体は家族がひきとることができましたが、葬儀は原発問題があって9月に行われたのでした。一方、遺体が不明な知人もいます。直接的にはそういう人たちの御霊に捧げる歌を作ろうと「舵」をきったのです。

最初の出だしは、被災の様子を実際に見たり、テレビ報道で見るたびに口から洩れる「あ、あー」という嘆息で書き出しました。一つ一つの言葉にも思いを込めたつもりですが2番まで作って、一応終わったと思つたのですが、1週間ほど後に不足を感じ3番を加えたのです。

2番に入れたお地蔵さまのことですが、震災問もなくのテレビ報道で、小雪が舞う道辺の地蔵に手を合わせている老婆が写しだされました。頭に赤い頭巾、そして赤い前垂れ姿の地蔵さまでした。そのとき、地蔵さまが「よく掌を合わせてくれる気持ちになりましたね。苦しいことや悩みごとがたくさんあるでしょう。でも、私は、雪の日も雨の日も風の日も笑顔を絶やさずにあなた方の幸せを祈っているのです。希望をなくさずに暮らしなさいよ」と諭しているように思われたのです。このことを、そのまま歌に取り込むと悲しみを強めるのではないかと考え、希望をふくらます季節をバックにした二番に収めたのです。

歌詞募集締め切りの4月末に送り届けてからは、小声で独りよがりの節回しで口ずさんでいたのです。しかも、歌うたびに違う節回しで。6月の下旬だったと記憶していますが、県の事務局から封書が届けられ、審査の結果採用されたということでした。正直、私の歌詞でいいの？という思いを持ちましたが、「何か所か直ささせていただきたい」という連絡もありましたので、承諾の返事を出したのです。

9月に、花巻で行われた研修会で「東日本大震災犠牲者に捧げる歌」の披露がおこなわれましたが、2つ、改められていました。一つは、1番から3番まで使っている「親よ、子よ、友よ」です。原案は「親よ、子らよ、朋友(ともびと)よ」でした。もう一つは3番の「津波襲来」です。私は「重波寄し」としていましたので、なるほどと思つたのです。

花巻大会で発表された翌年には、直接の被災地でない水沢の中学生が、去年は二戸の中学生が歌ってくれました。有難いことです。

◆「鎮魂の歌」 歌：岩手県退職校長会有志

<https://www.youtube.com/watch?v=W6aqk3aZaZo>